

---

# 魔法世界の異能持ち

稗田阿灯

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法世界の異能持ち

### 【コード】

N0138W

### 【作者名】

稗田阿灯

### 【あらすじ】

娯楽に飢えた神々は、アニメマンガの世界に一般人を転生させ戦わせることを思いついた。

殺すか殺されるかの戦いに生き残った者には報奨を与えるという条件付きで。

原作ブレイクを狙うもの、ハッピーエンドを望むもの、全てを壊すもの…。

さまざまな人物が集まるなか、一人の青年が転生する。

原作を知らない彼は、いつたいこの世界でどのような物語を歩むの

だろうかー！。

処女作です。誤字脱字が含まれるおそれがあります。それでもいいというお方は、どうぞお読み下さい。

## かつてないプロローグ（前書き）

どもはじめまして。  
作者です。

とりあえず気軽に読んで下さい。

## かつてないプロローグ

転生。

それは恐らくほとんどの人が望む事。

一部の人々は、特殊な能力を得たり、不老不死をついでに願う。

来世に期待するのは正直どうかと思うが、そんな個人の自由だ。

だがよく考えてみて欲しい。

転生をしたとして、その後の人生がどうなるか。

安易に考えていると大変な目に逢う。

俺自身適当に思っていた。

「もし転生なんかしたら無双してえなあー」みたいに。

「神様、俺を転生させて下さい！」とか。

もちろん、死ぬ覚悟がある訳でも無く、

あるわけないと内心諦めつつ日々を過ごしていた。

それが後々どういふ結果をもたらすのかなんて知るはずがないまま。

忘れてたんだよ、確率は0じゃないし誰にでも

起こりうる事だったんだって。

ふう。

そろそろ過去の事を思うのは止めよう。

現実逃避にしかないしな。

過去より未来を見ようって誰かが言っていた気もする。

…うん。ここらで察しのいい人はわかってくれと思う。

俺はなんと転生した！

だって足元に「転生乙」って書いてあるメモが置いてあるから。  
うん悪質だね。どうみても誘拐です本当にありがとうございました。

まあ仮に転生したと信じたとして、それはそれで嬉しいだろう普通  
は。

だけど、素直に喜べない俺。  
なんでかって？

普通はさ、なんかで死んで、変な空間行って、神様に会って、  
能力貰って、で俺ツエー、でしょうよ。

でも俺はなんの事故も現象も無く、気付いたら転生してた。  
まあいいよ。本当に転生出来たのならこれ程嬉しい事はないからな。  
だけどひとつ言わせて。

基本的に流されるように生きてきた俺だけどもさ、  
これだけは言いたい。

右、見渡す限りの森。

左、見渡す限りの森。

… 1111… 2111？

かつてないプロローグ（後書き）

感想もろもろある場合は、  
できるだけ優しくお願いします。

その1 難易度はvery hard(前書き)

主人公はシリアスとギャグの切り替えがはつきりしています。  
急に変わっても驚かないでね。



## その1 難易度はvery hard

さて、転生したはいいが何故か森の中にいる俺。

困ったとかつていうレベルじゃない。

むしろ命の危機を感じる。主に餓死的な意味で。

見渡す限り、周りに木の実の付いている樹は発見出来ず、  
更に言うなら水の流れる音もしない。

環境が整ってるのならしばらく居てもいいなんて思ってたけど、  
何も無いんじゃ仕方ない。

俺はどこかに何かあると信じて進む事にした。

ここで登場するのがそこら辺で拾った木の棒。

みんなやらない？ 迷った時には棒を倒して道決めるアレ。

意外にバカにできないんだよな！。的中率の高さが異常だから。

で、早速棒を倒す。

お？ 南西か 適当

じゃあ進みますかね。気分は密林の探検家。インディー・ジョーンズだね。

ふざけた事を考えていたら、いつの間にか暗い気持ちも晴れていた。  
そうしたら、足取りが少し軽くなるような錯覚。  
なんだか、うまくいく気がした。

時間にして一時間ほどだろうか。

ひたすらに歩いたが、何も見つからない。

それどころか動物の痕跡すらない。

そして地面が腐葉土らしきもののはずなのに、感触は鉱物的。

おかしい。もしかして俺が最初に思った「ここは異世界か」という直感も、

このおかしい場所のせいなのかもしれない。

ファンタジーの様な話しになるが、結界でも張られているのか。

思考のスイッチを真面目な方に切り替えた。

思考しながら歩みは止めない。

今は少しでもいいから情報が欲しい。

凡人の脳で今起きている事を理解するには圧倒的に鍵が足りない。

誰かに頼りたいと心から思う。せめて他に一人でもいれば違ったのかもわからないが。

気付いたら、開けた場所に来ていた。

ここだけ土が綺麗にならされている。

大きさはたった数メートルだが、コンパスでも使ったかの様に丸い円のかたち。

そう、例えるならば、【ヘリコプターが着陸できる】サイズ。

石ひとつ無い所に不自然な楕円形の石。

かかとで踏むと、カチツと、明らかに人工物の音。

押した直後に響く地響き、舞い上がる土や砂ぼこり。

自然の煙幕が晴れるとそこにあるのは、Hと大きく描かれた鋼の地面。

横にあるのは深い闇へ続く階段。

「…そういう事か。」

口元が無意識に弧を描く。

心臓の鼓動が早まる。

嗚呼。ようやく、ようやく確信できた。

ここはやはり自分の知らない世界で、そして俺は主人公。  
これから、始まるのか。

二度目の人生が。

その1 難易度はvery hard(後書き)

原作までが遠い(泣)

5話までにいけるといいんだけど…。

その2 俺、孤独、研究所にて（前書き）

独自設定有り。

ごめーんね

## その2 俺、孤独、研究所にて

地下へ続く階段を降りていく。

手すりも踊り場には照明がついているが、

ほとんどは割れ、残ったものも激しく点滅し、照明としての機能を半ば放棄していた。

明かりが無いから周囲が見え辛いのに加え、ガラスが散乱しているので非常に危ない。

履いているスニーカーにガラスが刺さらないように危なっかしく進む。

体感で十階程降りた頃だろうか、大きなフロアに出た。

ちよつとした体育館くらいか。

「ここだけ明るいな…。自家発電か？」

暗い中進んで来たあとに急に眩しい場所に出たので、

しばらく目が見えない。

目を慣れさせながら恐らく扉があるのだろう方向に進むと、

思ってもみない光景が広がっていた。

そこには、もともと大きな金庫の扉のように堅牢な門があった。

侵入者をこの地より遠ざけ、研究員を敵対するモノから守る役割を

もち、

俺のもといた世界のいかなる技術でも破れぬ鉄壁の守護。

それが、無残に、とてつもなくあっさり、破壊されている。

破城槌でも打ち込まれたか、中心に巨大な穴。

少ないとも俺は、こんなに大きな直径を持つ兵器や武器、その他物体を

見たことが無い。

ここで一体何が起きた！？  
なんか、頭がこんがらがる。

とにかく、先へ進まない事には何もわからないので穴から研究所内  
部へ。

幸い穴はジャンプすればなんとか届く高さだった。

淵に手をかけて、そこから己の腕力でよじ登り、そのまま向こうへ  
行った。

中を見て絶句した。

至るところに焼け焦げた跡が残り、まるでぶち模様だ。

床や天井には切り裂かれた様な傷、近くに黒ずみ固体化した何か。

ここが広いためそんなに多くは感じないが、数十はある白骨化した  
死体。

俺はここで戦争でもあったのかと考えていた。

だが、もうそんなレベルの出来事ではなかった。

大きな、死人がでる程の争い。

研究所。

死体は白衣を纏ったものばかり。

その側にあつた刀剣の類いや鈍器。

ここまでくれば答えはひとつ。

粛正、削除、排除。

様々な言葉があるが、結局は同じ意味。

虐殺だ。

禁忌を犯したか、親に逆らったか。

どっちだっていいが、つまるところこの場所で誰にとっての都合の  
悪い

研究をしていて、消された。

「なんだよ…これ…。こんなのが許されるのかよ！！  
何もかも殺しやがって！ 畜生！」

あまりの怒りに冷静な判断ができなくなりそこら辺の壁を蹴りつけた。

すると足元にあった機械も一緒に蹴ってしまったようで、少し離れた所へガンガン音をたてて転がった。

携帯に似ているそれは、蹴られた衝撃でスイッチが入ったのか電子音が鳴りしばらくした後画面から光が出た。

光は空中に留まり長方形のカタチで固定され、実体を持たないディスプレイが出来上がった。

直後映像が再生された。

『……………。』

…

…

「こちら…第44管理外世界研究所…

誰か…このメッセージを聞いていたら頼みがある…

すまない…時間が無いから簡潔に話す…

この研究所の、このデバイスがある場所の近くの壁に、隠し通路がある

その先にある武器を管理局の目に届かない世界に運んで欲しい…

絶対に管理局にだけは渡すわけにはいかない

なんなら、君が持っていてもいい

だが気をつけてくれ

所持には相応の覚悟が必要だ…最悪死もありえる…

だが、必ず君の力になるだろう



押し付けてしまつて申し訳ない  
頼んだ……』

映像には、初老の男性が、鬼気迫る表情でこちらに頼みを言つてきた。

背後から悲鳴や爆発音が聞こえた。

恐らくは襲撃中のもの。

自分たちはもう終わりだ、だから代わりに頼む、そんな思いが分かつた。

できればあの男性には生きていて欲しいが難しいだろう。

文字通り命を賭けた頼み。

なら無視する事はできない。

目の前の壁をおもいつき蹴りつけ薄い壁を崩す。

そうするとやはり通路があつた。

埃すらない床は、まだだれも通つたことが無いというのを教えてくれた。

よかつた。

ほつと安堵する。

管理局が何かはわからない。

ただ、こんな事する組織なのだから相当な悪なのか。

なら、いやなおさら渡す事はできない。

いざ、と一歩一歩進んで行った。

その2 俺、孤独、研究所にて（後書き）

少しずつ長く書けるようになってきた。  
嬉しいなあ。

あと、ヒロイン募集中です。  
敵味方問わず。時期問わず。  
お待ちしております。

**更新一旦停止のお知らせ (前書き)**

本当にすいません。(´>`>)

## 更新一旦停止のお知らせ

文化祭で忙しいとかってレベルじゃないので、  
9月9日まで更新を停止させて頂きます。  
本当に申し訳ございません。

次話は多少多めに書く予定ですのでゆっくりお待ち下さい。

…書く事無い…。

あ。彼氏ができましたー(笑)

…さすがに嘘です。すみません。

ヒロイン&amp;ライバル募集中です。  
ヒロインは、リリカルなのはキャラクター、  
ライバルは転生者、特殊能力は一個か二個。

一応無印からスタートなのでそこから辺よろしくお願いします。

でわノシ

**更新一旦停止のお知らせ (後書き)**

見捨てないで下さい。これからもよろしく願います。

その3 factor infect (前書き)

遅れてすみません。  
やっと更新です…。

### その3 factor infect

埃一つない真つ白な廊下を若干早歩きで進んでく。

さつき思ったが、埃一つないって正直おかしい。どーなってるの？何か仕掛けがあるんじゃないかと見回すと、丸い円柱状のナニカがこっちに向かって来た。

掃除ロボットだ。

この廊下がいつ作られたかは知らないけれど、もうちょっとどこにできないだろうか。

このあたりにここの科学者の狂気（一誉め言葉）を感じる。

ま、そんなどーでもいい事は置いておいて。

とにかく早足で、少しでも早く進む。

その管理局とやらがここに来ないとも限らないし、そもそも何が起きるか

わからないから心臓に悪い。

意外と怖がりなのよね俺。いい年してなにやってんだか。

というか本当に怖いね。至るところから霊の怨念の声が聞こえそう。おお、こわいこわい。

でも実際にありそうだから嫌だね。靈感ある人には見えたりするのかな。

つつつたつてこの世界には今のところ俺以外の人間は確認できていないわけだから、

確かめようが無いんだけど。

で、こっから出た後なにしようか？ やっぱり拠点作り？

なーんて考えてたらいつの間にかやたら大きい広間。あ、広間は大きい。とりあえずスルーで。



って言ったって、さっきの場所みたいなんじゃないな。博物館と研究所が合わさった異様な空間だ。

いくつもある通路の両端にはガラスケース。中は大量の武器。ほとんどがチューブに繋がれていて、柄や先端部にある宝玉を点滅させている。

うーん。どつかで見た様な見てない様な。

名称くらい書いてあるだろと思いがラスケースを覗きこむと、確かにあったよネームプレートらしきもの。

でも悲しいかな。全く読めない。

書体は英語っぽいけどよく見ると全然別のもの。

むしろ世界中のどの言語にも当てはまらない不思議な字。ますます異世界っぽくなってきた。

で、肝心の文字はどう頑張っても解読は不可能だったので俺は諦め、他の武器を見に行くことにした。

てくてくとぼとぼ、物音ひとつしない大部屋をたった独りでゆっくりと。

周りはみーんな武器とパソコン、あと奥の方向にあるいかにも怪しいエリア。

とりあえず護身用とそこらに飾ってあったナイフをケースから取り出そうと

おもいつき蹴りつける。

ドガッ！！

…やっぱり泥棒なんてするべきじゃなかったよね。

犠牲は大きかったよ。主に足の指的な意味で。

最初から腰にあるサバイバルナイフ使えばいいよ。

次は気を付ける。  
注意力の足りない自分にやれやれと呆れつつ、新たな教訓を一つ身に付けた。

少しバックして、さっき見た怪しいエリアに迷う事無く歩みを進める。

着くまで30秒。

そこ（・・・）は他の場所とは設計が違っていた。

一段、いや二段高い位置にある床には円卓に近い作業机がぽつんと一個。

余裕で周囲に30〜40人は居られるレベルのサイズ

その真ん中に存在する、異様な雰囲気を放つ長柄の武器。

人が使う事を想定されていないんじゃないかと疑う大きさの、装飾は一切無く、ただ相手を殺す事に特化した『ハルバード』。

対軍兵器と呼んでいい代物でありながらも、無駄のないカタチの刃。あまりの美しさに、薄い緑のフィールドがあるのにも気付かず、柄に触れようとした。

バチツと電流が流れ、薄緑のフィールドが濃い緑に変化し、狂ったようにスパークが起きる。

普通なら慌てて手を引っ込めるだろうが、俺はそんな事しなかった。むしろ激しい痛みを必死で抑えながら手を徐々に近付けていった。そして柄に触れ、瞬間電流を発生させていたフィールドが完全に消滅した。

指先がなぜか針に刺されたかのように痛んだが、電気による火傷だと思ひ込み、無視した。

左手で柄の端を、右手で中間を持ち一気に持ち上げた。  
ほぼ全てが金属製で、重量は数十キロにおよぶと思われたそれは、  
意外に呆気なく両手に収まった。  
こうして持つてみるとわかるが、かなりデカイ。  
俺の身長をもとにして計算すると、およそ2・5メートル。  
信じられない大きさ。見た目と釣り合わない重量。  
そして一般的な斧ハルバードにはない特殊な機構。  
不思議だらけの物体に、俺は惹かれていき、心の中に独占欲が生ま  
れた。

周りの機械が破損するのも構わずハルバードを片手で振り回す。  
これまた不思議な事に、全く振り回されなかった。  
というか重さを感じない。

それに、長年使用してきた感じがし、妙にしっくりくる。  
謎の違和感。

使ってるのか使われてんのか。

そんなのもわからないまま、元来た道を引き返す。

俺はこのハルバードを自分のものとし、持ち帰る事にした。  
後で気づいた事だが、おっさんが管理局に渡すなとっていたのは、  
一体どれだったんだろうな？ まあどうせこれだろうけど。

帰り道、練習ついでに斧槍を振り回す。

通路の壁が壊れるのも気にしないで。

はてさて。一体どうやってこれから暮らすと心の内で考えていた。  
そうすると突然、視界がぼやけ、周囲からの音にノイズが混ざる。

なんだ？ 目眩か？

ふらつく足に手を付きなんとか支える。

急に声が脳内に響いた。

『 やつとか。ま、案外速かったかな。  
一応及第点だ。』

直接脳に響く若い男の声。頭痛が酷い。

「 なんだてめえは?! 一体なんなんだ!?! 」

答えは無い。その代わり、視界は暗くなり、意識が薄れる。

『 かもーん幸運な人間。お前は選ばれた。』

軽いノリの声が聞こえ、俺は意識を失った。

その3 factor infect (後書き)

引き続きヒロイン&amp;ライバル募集中です。  
遠慮はいらないので、どしどし送ってきて下さい。

その4 俺は決定権が少ない、略してはがない。(前書き)

友人に指摘されました。

なんでも、植木の法則というマンガに設定が似ているとか。

全く知りませんでした。

なんかごめんなさい。

#### その4 俺は決定権が少ない、略してはがない。

暗く深い海の底に沈んでいた意識が、地上を求めて浮かび上がり始めた。

目がまぶたから透ける光を認識し、その光量からここは野外で昼間なのだ教えてくれた。

しばらくゴロゴロした後、パチツと目を見開いて  
テンプレートなセリフを呟くべく口を開いた。

「知らない天井……あれ？」

さつき野外と判断したばかりというにも関わらず天井を探すとは、  
随分と寝ぼけているようだ。

あくびをしながら目を擦り、何度も瞬きを繰り返し徐々に光になれ  
させる。

そして次の瞬間絶句した。

視界に映る全てが真っ白だった。

こういう天気とかなどでは無く、色の濃淡すらない一面の白。  
上体を起こし、自分の周り360°見回すが全て白い。

遠近感を失いそうになるこの空間は一体どこか？

考えられるものを挙げてみる。

1 誰かに捕まり閉じ込められた。

違うな。こんな場所は普通存在しない。というか造れない。

## 2 自分の夢。

これも違う。ちゃんと近くに例のハルバードがある。  
これはれっきとした現実だ。

## 3 別世界。

これが一番しつくりくる。そうだ。そうにちがいない。  
なら早速この辺りを散策しー、

『やっと起きましたね。』

全く気配を感じなかった！ この声の持ち主が何者かは知らないが、  
相当な実力者だ。

殺される可能性もある。

なら、先手を、こいつよりも先にアクションを起こさなければ…！！  
すぐさま右手の少し先にあったハルバードを掴み、後ろへ振り回そ  
うとして、

『わっ！ ちょっと待って！ 敵じゃありませんから落ち着いて！』

慌てふためく声の主にこっちが驚き手を止めた。

それからゆっくり振り向く。

殺意が湧く程のイケメンがそこにいた。

だがイケメンといっても、どこかおかしい。

CGでつくられた完璧な顔、そういった表現が似合う。

シミもホクロも無く、毛穴すらみえない。

誰かのイメージを無理矢理絵にしたような顔はいつそ不気味だ。

昔のギリシャの学者が着てそうな服を着て、手には一冊の大きな本。  
立派な青年なのに、イタズラっこを思わせる造形の顔。神様っぽい



格好。

どっかで見た様な…。

脳内で検索をかける。

するとヒットする一人の神。

俺はその名前を言ってみた。

「ロキ…？」

ロキとは北欧神話において災厄の神として扱われる、オーディーン  
の義兄弟。

美形で頭もいいリア充だが、しばしば悪事をして神々を苦しめる。

彼のラグナロクで神様に喧嘩売った内の一人。

そんな奴が何故ここに？

『あ、君にはそう見えるんだ？ ロキって言われたのは  
いままでで初めてだよ。』

ギャー！！ 早速違ってたー！！

うっわなにこれ恥ずかしい！ 多少自信あったからより恥ずかしい！  
なんかもう穴に入りたい。どっかない？

あまりの羞恥に頭を抱えながら辺りをのたうち回る。  
すると心配してなのか、イケメンが声をかけてきた。

『別に間違っではないよ。君がそう思ったのならその通りになる  
んだから。』

「そう思ったのなら？ どういう事だ。」

『まあその辺りの説明をこれからするから待つてよ。』

と言って謎のイケメンは指を一回鳴らし、俺との間に椅子とテーブルを創造した。

しかもテーブルの上にはしつかりお茶と和菓子が座つてと言われ仕方なく座る。ちよつと喉が乾いていたから茶をすする。旨い。

『じゃあ説明を始めるね。』

和菓子を一口。これも旨い。咀嚼しながら話を聞く姿勢になる。

「どうぞ。」

『うん、ありがとう。』

まずここは無名の地。これからの事を説明する為だけの空間。それ以外の用途は無い。

で、なんで君をここに呼んだかというところ、とあるゲームに参加してもらつたためなんだよ。』

「とあるゲーム？　つーかまずお前はなんなんだよ。説明しろ。」

『僕は君たちの世界というAI。』

君が、この状況を起こした原因だと思つた姿になる。

普通は女神か老人なんだけど…。君は特殊だったよつだ。』

つまり、俺はこんな事するのは神の口キぐらいしかいないと思つていたと。

で、こいつは俺のイメージを読み取りその姿になった。

プライベートの欠片も無いな。

「次。なんで呼んだか。」

『神は皆暇なんだよ。永劫に近い時間を過ごすわけだから。』

だから、いくつかの神は考えた。

「いつそ人間を用いた遊戯を作ろう」と。

そこで考え出されたのが、人間をいくらか選び、能力を与え、戦わ

せる事。

人間、特に地球の人間は発送が豊かだから、仮想の世界を次々に造り上げた。

そこに注目しない神じゃない。

つまり、適正のある人間を転生させ、一人につき一人の神が能力を与える。

そしてどこかの仮想の世界に複数放り込み戦わせる。

最後まで生き残った人間とそれを選んだ神には褒賞を。

死んでしまった人間は魂が輪廻転生の環から外され抹消される。

分かったかな？」

わかりたくもなかった。ここで俺の未来は誰かを殺すか消えるしか無い事になった。

だが拒否もさせてくれそうにない。

ならさっさと進めた方がいい。

諦めて認め、受け入れることにした。

「俺を選んだ神は誰だ？ まさか無名のやつとは言わないよな。」

「そこらは安心してくれ。担当はアルテミスだ。」

彼女が男を選ぶのは珍しい。いつもは処女を選ぶんだけどね。

まあ貰える能力はかなり強いよ。歴代最強クラスかな。」

「そりゃ嬉しいね。で、行く世界と能力を詳しく教える。」

「残念ながら無理だ。能力の詳しい内容と行く世界は教えてはいけない決まりだから。」

でも、一応君が知ってる世界みたいだし、能力の一部や決まりうんぬんは

後で本の形にして送る。」

「なら安心だな。ところで相手は何人で期限はいつまでだ？」

のんびりしてたら時間切れとか勘弁したいんだが。」

「相手は最低3人、期限はなし。強いていうなら死ぬまで。」

でも達成できないと皆消えるから気を付けて。」

「分かった。いつ出発だ？」

『今すぐ。』

随分と気が早いこと。

でもその方がいいね。

最後にひとつ聞きたいことができた。

「お前の名前は？」

「ロキ、と言いたいけど違うね。」

案内人ユト。

次に会うのは勝利が確定したときだ。」

足元に突然穴が開き、座ったまま落ちて行く。

命懸けの殺し合いね。

なかなか面白そうじゃないか。

精一杯楽しむとしますか！

と、上から声が聞こえる。

『開幕は君がたどり着いてから3日後だ！

それまでは誰も手出しはできない！

じゃあ頑張ってくれ！！』

「言われるまでもねーよ！！」

大きな声で叫ぶ。自然と顔が笑っていた。

そしてまた、意識が闇へ落ちて行く。

その前に重要な事に気づいた。

…あれ？ ハルバードどこ？

その4 俺は決定権が少ない、略してはがない。(後書き)

そんな訳で、敵の転生者を募集します。

名前、性別、外見、能力(一2つまで)、性格などをかいて感想欄へ。

一応ヒロインも募集中です。

その5 凶(まが)ればいいと思うよ。(前書き)

いままでちょっとずつ増えてきた文章量ですが、今回は若干減りま  
す。

ただ、明後日もう一回投稿するので許して下さい。

その5 凶(まが)ればいいと思うよ。

ハッと目が覚めた。

床を触って確認するが、今度はちゃんとしたもの、フローリングだ。頭の中から何か大切なものが抜け落ちたような感覚がするが、無視して立ち上がった。

見た限りここはマンションの一室らしい。

家族連れでも過ごせるレベルのサイズ。で、ここはリビング。

正面にキッチンがあったので、冷蔵庫をあさりに行った。

途中なんか踏んだが、たいして痛くなかったのでそのまま進んだ。

冷蔵庫の扉を開ける。

おっ、意外とものが揃ってるな。でもとりあえず水。

棚にあったコップにペットボトルの水を注ぎ、一気に飲み干す。

生き返った。冷たい水が、体の隅々まで染み渡った感じた。

もう一杯注ぎながら、さっきなんか踏んだ位置を見る。

ずいぶん分厚いハードカバーの本が、そこに置いてあった。

飲み終わったコップをシンクに置き、リビングへ歩く。

しゃがんで手に取った一冊の本は、一切の装飾がなかった。

タイトルさえもない。

裏には、丸っこい女子高生みたいな字で、

『葉月紫苑へ』

と付箋紙に書いて貼ってあった。

葉月紫苑？ 誰の事だ？ まさか俺ではあるまい。

だって俺の名前は……あれ？

思い出せない。

さっきまで、案内人のユトと会話していた時までは、自分の名前なんて自覚しなくてもわかっていたのに。そうか。さっき思った喪失感はこれだ。

畜生！ ユトからはこんな事聞いて無いぞ！

答えが本にあるのを祈ってページを捲る。

【この本について】 どうでもいい。捲る。

【あなたのステータス】 これはこれで気になるが、今はそんな余裕はない。

人は予想していない事に直面するとパニックになる。それは俺も例外ではなかった。

焦って焦って、ページすらまともに捲れない。

自分の名前を失い、正気でいられる者はまともじゃない。

自分が無くなってしまう気がするから。

自分の存在が危ういモノになった気がするから。

俺はページを捲る傍ら、記憶に欠けている部分が無いか確認している。く。

幼い頃の思い出、友人の顔、そして両親の名前。

やはりというべきか、両親は名字が、親友と交わした会話の中で俺の名前が潰されていた。そだけノイズが走る。

だが、名前以外は無事という事実には落ち着き、冷静になった。

ようやく見つけたページには、【状況把握の為に】とサブタイトル



がふってあった。  
読んでいく。  
なるほど。

全てを並べると莫大な量になるので要約すると、  
まず衣食住は完全保証。今いるマンションはくれる。  
金は最初100万貰えるが、それからは自分で稼げ。  
名前についてだが、なんでもこの世界にもいる俺に迷惑をかけない  
為だとか。

じゃあこの世界の俺消せとか思った俺は悪い大人。

で、最後にあるのは一番重要な、殺し合いについて。  
戦闘開始時刻は、俺が目覚めから72時間後。  
それまでは見る事も触る事も出来ないそうだ。  
随分よく作ってある。感心するね。

一度本を閉じてため息をつく。  
今さらながら止めたくなってきた。

それでも、自ら始めたからには途中で降りない。  
俺なりのルールだ。まだ死にたくないしな。

本を枕代わりにして一旦横になる。特に理由はない。  
精神的に疲れた。それだけだ。  
硬いが寝れない程じゃない。

ふと、天井を見て、ひとつの電球が気になった。  
なんのへんてつもない普通の電球だが、突然割ってみたいと思った。  
脳裏に浮かぶ、一人の少女。

確か彼女は、ある言葉を唱えただけでモノをねじ曲げるといふ超能力を持っていて…、

彼女のような力があれば、イカれた殺し合いでも生き延びられると思っただ。

ある訳ないと、笑いながら電球を指でさし、軽い調子で言った。

「…凶<sup>ま</sup>れ。」

突如視界が歪み、激しくはないがそれなりの頭痛が俺を襲った。

何事かと考える余裕もなく、頭をとっさに横に動かす。

さっきまで俺の頭があつた場所に細かいガラスの破片が飛び散った。背筋が凍った。冷や汗が吹き出す。

うわあ…。なんてこつた。結構笑えない。

慌てて体がその人物でないか確認した。

大丈夫だった。男のままだ。

……子供になつていたがな。

もうなにがなんだか。

女かとおもつて、子供になつてて、危うく自滅しかけた。

とりあえず、今度からは不用意に喋らないことにした。

その5 凶(まが)ればいいと思うよ。(後書き)

まだまだ転生者&amp;amp;ヒロイン募集中です。

どんな案でもいいので、よろしくお願いします。

転生者は、名前と能力(2つまで)、できれば外見や性格、戦い方など。

ヒロインは、フェイトとリインフォースが一步有利だったり。

お願いします、案投稿少なすぎて辛いんです。

その6      いいか皆。小五とロリでは只の犯罪だが、会わせれば悟りとなる。つ

まーだまーだ転生者& a m p ;ヒロイン募集中です。

どんな案でもいいのでお願いいたします。

その6 いいか皆。小五とロリでは只の犯罪だが、会わせれば悟りとなる。

とりあえず、この世界にきてから真つ先に気付かなかった俺に、小一時間蹴りを入れ続けたい。

今考えると確かにコップ取るとき、あれ？ 位置高くね？ と思っ

た。でも疑問にすら思わないとか、年取ったかな。あ、若返ったんだっけ？

まあ体が小さいこと自体はたいした事じゃない。

どうせ長いゲームだ。その内成長するだろ。

それよりももっと重要なのが一個。

冗談のつもりでやった歪曲の魔眼。それが本当に発動するとは。

いや、別に嫌な訳じゃない。むしろいい。

これからの殺し合いにて非常に頼もしい武器、そして切り札になる。浄眼でも持たない限り目視は不可能だし、直死の魔眼でもない限り、俺の目に対抗できない。

ってそうじゃなくて。俺はこの世界に来たらまず最初に、能力について少しでも多く知るべきだったんだ。

ついさっきまで枕代わりにしてしまっていた本を開き、目次から貰った能力に関わるページを探した。あった。一番後ろの方。

すぐそこに折り目を付け大きく開いて床に置く。

見開きの白いページにあるのはたった2行。

【 あなたの能力について 】、『魔眼、魔道具作成』のみ。

空白が大きいのが若干気になるが、印刷ミスか。  
サブタイトルの星は無視するとして、驚いたのは魔眼の二文字。  
能力名魔眼だと？ ならもしかして他の魔眼も使えるのか…。  
ものは試し。やってみた。

-----

まず俺が知っている魔眼は6つ。

浄眼、直死、歪曲、石化、暗示、誘惑。

一応いま試せるのは直死と歪曲だけ。

歪曲は限度がわからないので実戦にて試験する。  
なので試す魔眼は直死のみ。

一回歪曲の魔眼の力を切る。

プツンと、電源を切るかのようにあっさり切れた。

いままで僅かに歪んでいた視界が正常なものに戻る。

微弱な頭痛もなくなった。

そして直死のスイッチを入れる。

目を閉じて心を落ち着かせる。

イメージは遠野志貴。両儀式のは生物のしか見えないから駄目だ。

目が変質する。この世の全ての、

この世界そのものまでの死を理解、認識できるように。

変化が完了したのを確認した。ゆっくりまぶたを上げる。

…覚悟はしていたが、やはり酷い光景だ。

視界全ての物質に黒い線が走り、線の集まった所には大きな点も見  
える。

この目の持ち主も言っていた。この世界はこんなにも脆いって気付  
かされる。

台所から包丁を一本持ってきて、テーブルの上の花瓶の線をなぞる。表面を軽くなぞっただけなのに、花瓶は斜めに崩れる。花もなにも入っていないかったので溢れたものはひとつもない。

次は何をしようか迷って、包丁を置いた直後脳が燃えるように熱くなった。

いくらこっちの直死が負担が大きいつても、異常だ。

こんな代償のある武器なんてそうそう使えない。

すぐに直死を止める。元の視界に戻る。だが熱された脳はなかなか冷えない。

これで一旦魔眼は終了。

お次は魔道具作成スキル。

とりあえず、簡単な爆発符でも作るか。

作るのに必要な知識が勝手に頭に入ってきた。

紙とペンのみでできるのか。お手軽だ。

またやり方も簡単。適当なサイズに切った紙に、ルーンを書き、

そこにそこそこの魔力を流し込むだけ。

だけ…なのだが、込める魔力が意外に多い。

20枚を超えた時点で魔力が切れた。

俺の魔力量少なすぎだろ。平均のちょい上しかないとか。

つつたつてないよりはマシだから文句は言えない。

なんか魔力を多く使ったからか、体がだるい。

このまま寝ようとも思ったけど、まだ本を隅々まで読もうと考えてまた本を開く。

ちょうど開いた場所が、自分を選んだ神とのコミュニケーションの仕方だった。

どうやら、心の中で心の中で名前を呼ぶと下級神の場合は会話のみ、上級神の場合はこっちに呼べるらしい。

やろうと思ったが、アルテミスって結構面倒な神だった。外見は確実に美人だが性格は若干荒い。

例をだすと、水浴びを狩人に見らた事に怒り、その狩人を鹿に変えて、

わざわざその狩人の猟犬に殺させるといった。

特に処女でない女に対しての扱いが酷い。

そんなやつを呼んだらどうなるか。

ろくな事にならない。

止めよう。

さて、寝るか。

すると後ろから大きな足音が。確か後ろは大部屋があったな。だんだん近付いて来ている。

振り向いた瞬間、鼻に凄い衝撃が。

「そおい！」

「ぶべらっ!!！」

少女と幼女の間みたいなやつに飛び蹴り喰らった。数歩後ずさる。

「ッテメ、何しやがる!!！」

「なにしやがるはこつちのセリフじゃボケ!!！」

いつまでたっても呼ばねえし、私の事面倒とか思ったる!!！」

「思っつてねえし、まず誰だお前。幼女のクセに生意気な。」

「幼女つていうな!!！」

また鼻に蹴り喰らった。やべ、鼻血止まんね。ティッシュティッシュ。

「私はアルテミスだ!!！」

「はあ？」

こんな幼女が？ 冗談もほどほどにしてほしいね。

証拠見せる証拠。

『あー、アルテミスさん？ あなたの名を騙る幼女がいますよ。』



今すぐ来て下さい。』

『お前さすがに死ぬか？』

念話に反応したよ。本物だった。

「本当すいませんでした。」

「全く…萌えるかと思ったからこの姿にしたのに。

失敗だったか？」

いやそのままです。

「よろしい。」

あーもう。混乱の極みだわ。

幼女は可愛いからいいけど。

綺麗で全く傷んでいない金髪。

顔は幼いながらも、凛々しく、泣き黒子が禁断の色気を放っている。

もちろんシミソバカスも一切ない。

年の割には発達したスタイル。

身に纏うワンピースは薄い水色。

うーん、ホントこの世のものとは思えない美しさ。

確かに人外っぽい。

「なんで呼んでないのに来れたの？」

「私だけの特権だ。父上にこの姿でお願いしたらあっさり。」

ゼウスってそっちの趣味あったのか。

個神の趣味だし口答えはしないが。

あ、そうだ。頼みたい事があったんだ。

「ちよつと俺の能力を」

「とりあえずお前を、これからの三日間で鍛えてやる。

ありがたく思え。」

…ありがたく思います。

俺の意見がほぼ無視された状態で始まるこれからの戦い。

まず、生きて帰れるかな？

幼女に訓練されるってなんかこっぴどくあるものがあるね。

戦闘開始時刻まで後69時間。

刻一刻と、運命の時は迫っていた。

その6      いいか皆。小五とロリでは只の犯罪だが、会わせれば悟りとなる。

【浄眼】

ありえざるものを見る目。幽霊とかも多分見える。

【歪曲の魔眼】

見たものをねじ曲げる目。右目は右回転、左目は左回転させる。  
ただし、現象と、自分がまげられないと思ったものはまげられない。  
失明の可能性を持つ。

【直死の魔眼】

ものの死を線と点で見れる目。それで切った場所は再生すらできない。  
ただ、代償が大きく、廃人になる可能性も。

その7 邂逅は直死の後で。(前書き)

アルテミス「呼んだ？」

紫苑「帰れ」

## その7 邂逅は直死の後で。

【Side 葉月紫苑】

地獄の鬼も裸足で逃げ出すような訓練が続いた。

詳しい事はトラウマなので記述したくないが、少しいつと修行は三日におよび、そのおかげで俺の魔力量は大きく上昇した。て、いったってたいした量じゃない。1・5倍程度だ。もとが低いから大変だな。

そして、さまざまな事を教えてもらった。

禁則事項が多く所々喋れないものがあつたらしいが、それを差し引いても十分だった。

能力者には決定的な弱点があつて、それを攻めるのが有効だという。弱点にも2つ有り、所持する能力の弱点と本体にある弱点だ。

本体にある弱点は確実に致命的な弱点になると言われた。

ちなみに俺の弱点は、魔力素に因むものらしい。

空気中の魔力が濃い場所には行くな、だと。

気絶したりしてな。無いか。

ところで、あつという間に戦闘開始時刻になつたわけだが、俺はこの街、海鳴の中で一番高いビルの屋上に来ている。

もちろん転生者の搜索の為だ。

アルテミスから教えてもらった気配隠蔽の札。

それを使って発見されないようにして海鳴全域を見回す。

もちろん遠くまで見えるはずないので、直死の魔眼を一分ごと二十秒ずつ使用する。

短く区切ったから、脳が加熱することもない。

現在時刻は夜9時。一般人は普通出歩かない時間。

だから不審な人影を見つけたら調べ、敵の場合攻撃する。簡単なお仕事です。

お、お父さん残業お疲れ様です。

張り込み？の定番、あんパンと牛乳を近くのコンビニから買ってきて食べていると、突然ちよつと遠くの学校から眩しい光が。

念のため直死を志貴のものに切り替えると、案の定空中に莫大な魔力を撒き散らす宝石が浮いていた。

どうしよう。超行きたくない。

だって魔力を撒き散らす宝石だよ？

間違い無く魔力素濃いよ。

でも行かないと帰ってからアルテミスに殺されそう。この腑抜けがツ！！って。

念のため持ってきたハルバードを掴む。

仕方なく転移符で学校の校門の位置に移動。

張ってあった結界を、直死で見える線を切って破壊。

門を乗り越えて原因の場所へ向かった。

【Side 高町なのは】

『Stand by, ready』

レイジングハートが、開始の合図を言った。

どうしてもこの瞬間は緊張するなあ。

きつちり気を引き締めて、封印の為の呪文を、間違えないように一字一句しっかり発音する。

「リリカルマジカル！ ジュエルシード、シリアル??、封印！」  
『Sealing』

掲げたレイジングハートに魔力を注ぎ、封印の魔法を発動させる。辺りにピンク色の光が溢れた。

もちろん、結界をはっているから、外にもれることはないんだけど。一瞬だけ目をつぶり、開けたらもう光は収まっていた。

よかった。無事に封印できたみたい。乱れた呼吸を整える。

「なのは、お疲れ様。」

ユーノくんが近くに駆け寄ってきてくれた。

すぐに、ゆっくり落ちてくるジュエルシード。

青いひし形の宝石に見えるそれには、??というシリアルが刻んであった。

「これでいくつ目だっけ？」

「5つ目だね。あと16個、頑張ろうねなのは。」

一周間で5個だから、もしかしたら1ヶ月で集まっちゃうかも！

…それにしても疲れたな。もう眠い。

「じゃあ帰ろうか。夜も遅いしね。」

「そうだね。」

ユーノくんを肩に乗つけて学校の外に歩いていく。歩く間にユーノくんは結界を解こうとしている。

結界が、いつもとは違い崩れるように消えていく。あれ、おかしいな？ どうしたんだろう。

「なのは！ 大変だ、結界が誰かに破られた！」

慌てた口調で話すユーノくん。

フレットだから表情はあんまりわからないけど、危ないのはわかった。

「こつちに来る、気をつけて！」

『B e c a r e f u l , m a s t e r 』

目を凝らすと、確かに人影がみえる。

でも…なんでだろう？

目の部分だけが青く輝いている。

その誰かがかなり近くに来て、光に当たって姿がわかるようになった。

結界を破って来たその人は、中学生くらいの、不思議な男の人だった。

【Side 葉月紫苑】

校庭の真ん中あたりにいた犯人は、小さい少女だった。服装はどっかの制服っぽい。



肩に乗っているイタチもどきはこつちを睨んで動かない。  
手に持った杖？はよくある魔法少女がもつふざけた玩具ではなく、  
機械でできたまともな代物だ。  
まあ幼い少女だからといって警戒を解く理由にはならないのだけど、  
右手に持っているハルバードの刃先を少女に向ける。

「お前何者だ。まさか一般人だなんていうなよ？」

二人とも体が一瞬強張った。

戦闘にはあまり慣れていない証だ。

少女の方が若干ためらった素振りを見せたが口を開いた。  
最も、その前に肩のフェレットが喋ったのだが。

「僕はユーノ・スクライア。魔導師です。

この街に散らばったジュエルシードというロストロギアを回収する  
為に動いています。

この街の住民に危害を加えるつもりはありません。」

…つまらん。一番最初に出会った人物怪しいは転生者では無く、た  
だの回収者か。

なら俺は関わらない方がいいのかもな。

見た限りこいつは主人公かヒロインだ。

どうせしばらくしたらこいつの近くに転生者がつくだろう。

見つかったらヤバイ。いきなり実戦は避けたいところ。

よほどの事情がない限りは近付かないようにしよう。

今日は収穫なしか。

仕方ない、帰るか。

「行け。」

「あ、え？ はい。」

「ただし、こちらに余計な荒事を持ち込むようなら、俺は容赦なくお前に剣を向けよう。」

ハルバードを降ろす。あわてて走り去って行く少女とフェレット。また会つのかもな、嫌でも。そんな気がするよ。

「ふう、疲れた。飯どうしよう。」

「おかえりなさい。お風呂にする？ ご飯にする？ それとも…私？」

俺に安息の日々が訪れるのはまだまだ先のようだ。とにかく。

「新妻風出迎えとかどういう神経してるんだお前は。」

「テンプレートなセリフなのに答えないとかどういう神経してるんだお前は。」

まずはこのふざけた幼女をどうにかしないと。

その7 邂逅は直死の後で。(後書き)

週二更新始めました。

その⑧ はーい、邪魔者はごまっさちやめしなえ〜（前置き）

めいぐらごらごらっしなえー…

その8 はい、邪魔者はしまっちゃんおつねえ〜

朝起きて、眠い目を擦りながら自分の部屋を出てリビングに向かう。キッチン寄りにあるテーブルには何故か和食の朝食があった。湯気があがっており、まだできたてのようだ。

キッチンにはあたふた動くちっちゃい生物。いつの間にやらあったパジャマを着ているそいつに声をかける。

「お前がこれ作ったの？　すごいじゃん。」

棚の中をあさっていたアルテミスは顔をあげると、ドヤ顔でこっちにふんぞり返った。

「この程度私には朝飯前なんだよ。どうだ、私の凄さを思い知ったか？」

確かに凄い。だけど一個ミスを犯しているな。

「その料理本はなんだ。」

「……」

片付けを忘れたのか無造作に置いてある料理本。至るところに折り目が付いている。

何度も何度も確認したのだろう、自然に本が開いてしまっている。見栄をはるから……。

「うるせえ早く食え！　冷めるだろうが！」

真つ赤になつて怒るアルテミスをなだめながら、俺は、精神が体に引つ張られるつて本当だつたんだと思つた。  
カリスマ溢れる神様も好きだが、可愛い神様も好きだな。

椅子に座つて、アルテミスに言われた通りさつさと食べる。

美味しい。鮭の焼き加減もいいし味噌汁も少し薄めでちょうどいい。

これで人間だつたらいい嫁さんになつたらうに。

「ところで。」

「ん？」

アルテミスが口に浅漬を入れながら喋る。

こら、マナー違反だ。やめなさい。

「市街地に不審な魔力が渦巻いている。」

正確に言えば市街地に向かう物体が、だな。」

「行けと？」

「ああ。おもいつきり暴れてこい。」

たまにあれを使ってやらないと拗ねるぞ？」

あれとは恐らく俺の部屋に立て掛けてあるハルバードの事。

そうか。なら行こうか。

食器を片付けて、身支度を始めた俺にアルテミスが一言言ってきた。

「あのハルバード、柄の端に短刀が仕込んであるだろう。近距離で使え。」

用意終了。ハルバードの柄に転移符の座標を示す札を貼る。これで懐の召還符を使えば呼び出せる。一応ポケットにはサバイバルナイ

フ。

出迎えに玄関までアルテミスがきてくれた。

玄関で靴をはく俺は、全ての子どもを喜ばせるであろう一言をこつそり言った。

「お土産、何欲しい？」

「ケーキ！」

ひまわりのような笑顔だった。

-----

で、やって来ました海鳴市街地。この街で一番都会っぽい。

しかし迷ったおかげで現在は正午を少し過ぎた頃。

着いたのは11時くらいだったが、地形把握と高い場所の確保、それと昼食でいぶん時間をとってしまった。

こりゃ怒られるかな。

ご機嫌とりとお土産の為にケーキ屋を探す。

大きな百貨店が見えたのでそこへ向かう。

途中、赤信号に引っ掛かった。

ちょうど反対には小学生くらいの男女。

何かを少年がプレゼントして、それを喜ぶ少女。

リア充め、死ぬがよい。

呪詛の言葉を口の中で呟きながら信号が変わるのを待つ。

そういえばマンションのお隣に挨拶いつてないな、なんて考えてい

たら、

突然、

爆発的な魔力流。

ああ、確かにさっき少年が少女に渡していたのはこの前みたジュエルシードっていうやつに近かったさ。

だけど…

なにも、目の前で発動する必要はないんじゃないか？

魔力流の原因を潰そうと内ポケットから転移符を取り出す…つもりが、できなかつた。

心臓が強クドクンと鳴る。

すると胸の付近に急に現れる激痛。

畜生、一体全体なんなんだ！

何故こうなったのが全くわからない。

症状は心臓発作に近い。

じたばた胸に爪をたててのたうち回る。

とはいっても激痛に耐えられず、俺はあっけなく意識を失った。

目に映る視界は、この地球上のどの植物より大きくなった樹が俺もるとも地面を破壊する光景だった。

…  
…  
…

どれくらい時間がたったのか。



心臓の痛みは完全に消えており、後遺症も今のところないようだ。夢かと思った、しかし目の前に広がる一面の樹が、さっきのは現実だと理解させてくれた。

不幸中の幸いというべきか、俺は全く樹に巻き込まれなかった。ついでにいうと後遺症もなかった。

だがその代わり、周囲は樹に囲まれ閉じ込められている。奇跡的に手元に残っていた転移符を破り捨てる。

俺の作った札のほとんどは破壊する事で効果を発揮するものだ。大抵の攻撃系の札にはFアンサスという発火にルーンを刻んである。起動トリガーの言葉を発すると発火、そして効果発動となる。

だが一部のもの、特にサポート系や回復の札には書いていない。勝手に発動されても困るからな。

だからいちいち手や道具を使う必要があるのだが…。

それはさておき。

一切のタイムラグ無く出現するmyハルバード。それを鎌のように構えた。

魔力を注ぎ、刃の部分に現れる魔力刃。色は深く濃い青色。俺の魔力光だとか。

全長が3メートルに届くか届かないかの大きさになったハルバードをおもいっきり叩きつけた。

無論目標はこの大樹。

目の前の樹は木っ端微塵に砕け散り、太陽の光が射し込んだ。

落ちてくる破片に気をつけながら外に出ると、同じような樹がいっぱい。でかすぎんだろ。

いつそのこと燃やすかなんて思いポケットから爆発符を一枚。根っこの場所を探そうとしたその時、強い魔力反応。とっさにビルの屋上、ついさっき俺が探ってたところを見る。するとまたいる白い魔法少女。

よく見ると後ろの方にはこの前には一緒に居なかった男の子が。どっかでみた白と黒の陰陽剣を持っている。

また面倒ごと起こしやがって。いっぺんお灸を据えてやるよ。

白いのがレーザーっぽい撃とうとしているが関係無い。魔力で強化した脚で一気にビルの屋上に飛ぶ。

「誰だ！」

赤い外套に白い髪の少年はいきなり現れた俺に警戒する。急にオーラが出やがった。

「この前の男の子！」

魔法少女は覚えてるようで、わざわざ砲撃を中止して驚いてくれた。

「なのは、知り合いか？」

「うん。学校でジュエルシードを見つけた時に出会ったの。名前も知らないけど……」

「そうか…なら事情を話せば協力してくれるのかもな。」

「お願いしてみよう。」

おい、俺を置いて会話を進めるなよ。

「あの…私高町なのはって言います。

もしよかつたら私達と一緒に…きゃあ!？」

「なのは!？ お前、なにをする!？」

なにつて？ ただ斬りかかったただけだけどなにか。

「別にいいじゃないか。ケガないんだし。」

悪びれる様子一切なく答える。まあ挑発の一種なんだが。

「くっ、なのは！ 先にジュエルシードを封印しろ！ 俺はこいつを止める!！」

「わ、わかった。気をつけてね竜君!！」

俺らから離れて封印にいくのはとかいうガキ。

「で？ どうする?？」

ポケットからありったけの札を取り出す。

「どうするもなにも、行くぞ!！」

竜というやつが挑みかかってきた。

どうせこいつは転生者だ。遠慮の必要はない。

歪曲の魔眼を起動させた。

片手でハルバード、片手でハルバードから抜いたナイフ。

「来い、殺してやる。」

邪魔者は、殺さないとな。

厄介事を持ち込む野郎はいらないから。

高くハルバードに掲げる。

それが、開始の合図になった。

その8 はい、邪魔者はしまっちやおうねえ〜（後書き）

アクセス20000、PV5000を越えました。本当にありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

その9 少年幻葬〜nekura fantasy〜(前書き)

初めての戦闘描写。

出来れば広いところでよんであげて下さい。

その9 少年幻葬〜nekura fantasy〜

「行くぞオラア!!!」

開幕直後にハルバードを全力で投てきした。

「くっ!!!」

もちろんエックスの字型にクロスされた陰陽剣によって弾かれる。

だが、弾かれ、ハルバードが飛ぶ方向はこっち向き。

高くジャンプして空中でそれをキャッチ、そのまま一回転して叩きつけた。

自重と遠心力、そして俺の腕力が加わった一撃は、相手を吹き飛ばすには充分だった。

追撃も考えた。しかし空中で普通に受け身を取られ着地されたのであきらめた。

「トレース・オン投影・開始。」

バックステップで大きく距離をとられる。

そして呟かれる呪文。

同時に現れる黒い洋弓と捻れた剣。

辺りの気温が一気に下がった。

あれはヤバい!!!

防御系の札を全部使い、現時点での最強の魔力防壁を作った。

「I am the born of my sword」我が骨

子は捻れ狂う。」

キツとこちらを睨み付けた転生者。  
ついに初撃が放たれた。

『偽・螺旋剣（カラドボルグ？）！！』

矢に添えてあつた指が離れた直後、知覚させる間もなく強烈な閃光と爆発に飲み込まれた。

防壁はあっさり破壊され、威力軽減にしかなかった。

それでも、致命傷は避けられた。

おかしいな？ 宝具はこんなに威力低かったっけ？

辺りは黒煙によつて全く見えない。

だが、俺なら、直死の魔眼を使う俺ならばつきり見える。

吹き飛ばされたおかげで離れた距離はおよそ10メートル。

死の線でなんとかわかる人間のかたち。

その両足の、関節辺りを治せるレベルで曲げる。

おかしな内股のようになった。

「ああああああ！！」

関節が本来曲がるはずのない方向に曲がったからか、ものすごい大きな声でわめく転生者。

落ち着くのをまって近づく。

両手にハルバードと仕込みナイフをもったままだが。

「お前、どうしてこんな事を！」

どうして？ ケンカを買ったからには最後までだろ。



売った俺も悪いが買ったお前も悪い。

「お前、竜とか言ったか。  
転生者の癖になにいつてんだ？」

そもそも俺らが転生した理由は殺し合いのためだろうが。  
なのに、戦いたくないみたいなこといいやがってよ。  
偽善者か？ ああん？

「この世界にきたなら、ハッピーエンドを目指そうと思つのが普通  
じゃないのか！？」

「あいにく、俺はこの世界がなんなのか知らないんでね。  
仮想の世界の住人なんざ、殺す事に躊躇いも躊躇もねーよ。  
つーかお前俺を殺す気で放つたろ。」

「非殺傷設定つぼくしたんだ。込めた魔力も少ないしランクも下げ  
た。

直撃しても死にはしない」

「あつそ。」

あ、待て。 もしやこいつ、聞いてないのか？

「お前、ここに来た理由くらいは流石に知ってるよな？」  
「当たり前だ。犠牲者を無くし、悲しみを和らげるためだろう！」

ハッ、笑えるね。基本ルールさえ知らないとは。

「わかんねえなら教えてやる…といたいが、面倒だ。  
ここで死ね。」

今できる最高出力で胴体を捻切りにかかる。

パキツといい音がして、そのまま千切れるかと思っただが、邪魔が入った。

「だめー！ー！ー！」

高町なのは、白い魔法少女だ。

ピンク色の砲撃が俺だけに当たるように飛んできた。

封印は終わったのか。予想外だな。

あと数秒で殺せたのに。

ハルバードを振り回し、向かってくるレーザーを打ち消しながら後ろに下がる。

転生者は胸から光に包まれた剣の鞘を取り出した。

みるみる治る全てのキズ。

『全て遠き理想郷<sup>アウアロン</sup>』か。

厄介過ぎる。

さてこれからどうしよ…危なっ！！

剣の雨が降ってきた。

高町の援護のつもりか。

「ロールアウト工程完了

バレットクリア全投影待機

フリーズアウト停止解凍

ソイドバレルフルオープン全投影連続層写！！」

もう一回くる剣軍。

元々が狭いビルの屋上だ。そんなに逃げ切れない。

あっという間に追い詰められた。

「真つ正面はきついか。

ここらが潮時かね。」

「なにをぶつぶつと。投降するなら今のうちだぞ。」

「だが断るってね。」

一旦目を閉じる。

そしてゆっくり開く。

ありとあらゆるものを石化させる魔眼が、現世に降臨した。

直視したかは重要じゃない。

相手を見た。ただそれだけで石になる。

「マズイ！　なのは逃げる！！」

しかしもう遅い。

二人とも足の先から段々と石になっていつている。

一応なのはは對抗しているようだが無駄だ。

結局止められず、諦めるしかない。

止める方法は1つだけ。

俺が目を閉じるか、それとも…

「全て遠き理想郷アウアロン！！」

彼のアーサー王が持っていた聖剣の鞘。

真名解放すれば所有者を全てから守るといつ。

同時に擬似的な不死も得る。

それなら確かに治療も可能だよ。

まあその間に逃げさせて貰うよ。

後ろで待てと聞こえたが待たない。  
というか待つ馬鹿はいない。

屋上から飛び降りする。

無論途中で転移符で家に帰るが。

アヴァロンの強烈な光は目眩ましになる。  
自業自得になるのかな？

「お願い！ 話を聞いて！」

聞かねーよあほ。

全く…初戦闘はなーんかもややめた結果で終わったな。次はもう  
少し上手く殺りたいもんだがね。  
文句言っても仕方ない。  
今日はさっさと寝る。

案の定お土産忘れて途中の翠屋ってところで買って帰った。  
店員さんの顔がどっか高町に似ていたが、気のせいだよな？

その9 少年幻葬〜nekura fantasy〜(後書き)

剣と魔法と学園モノ。3が面白い。

更新進まない…。

すいません…

その10 わかりやすいEC兵器(前書き)

今回は説明回です。  
なので短めです。

タイトルの元ネタわかった人は感想欄に。

その10 わかりやすいEC兵器

「ん？」

朝、昨日の精神的な疲れも取れないままベッドから飛び起きる。

洗面所に行つて顔を洗っていたら左手首から腕の半分までくらいにかけて刺青があつた。

尖つたラインだけでできている、かなり刺々しいものには一切覚えがない。

なんだこれ？ いつの間に？

困つたときのアルテミス、つてことで

リビングのソファアに座り、テレビでアニメを見ていたアルテミスに問いかける。

「ちょっと悪い。気がついたら変な刺青があつたんだ。これなんだか知ってるか？」

テレビから顔を一旦あげてこちらをみた。

「ああ、それか。お前、昨日仕込みナイフ使つたろ？ だからだよ。」

つまり、お前のせいか。

一回殴らせろ。

「だが断る。知りたいんならgggrks。」

「ググって出たらおかしいだろ。さつさと教える。」

しようがないなとしぶしぶ自分の部屋からホワイトボードとマジックを持ってくるロリ女神。

伊達メガネと白衣を着て講義を始める。

「まず、お前の持つハルバードは、デイバイダーという兵器だ。

こことは違う世界にあつた世界の戦乱時代、魔法をつかうものへ対抗するために作られた『世界を殺す毒』。

その短剣だが、リアクター、反応触媒だな。

大抵無機物の小さいもので、血液認証させることによって大きな力を得る。

…ここまでで質問は？」

「デイバイダーの数、その世界とはどこか、あと血液認証の仕方。」

「数は正確なのは不明。最低996個。もちろん試作品なども含むが。

世界は知らん。確かベルカとかいう国。

血液認証は簡単だ。自分の血にリアクターが触ればいい。」

「続けてくれ。」

「わかった。

血液認証、リアクトするとほぼ不死になる。

魔法は特殊なのを除いて無効。

再生能力も追加される。

またそれらと別に1つ能力追加。

主に肉体の硬化や超速再生だ。」

反則レベルなシロモノだな。でもいいことばかりじゃないんだろう？

「当たり前だ。

リアクターにはエクリプスウイルスが付いている。

エクリプスウイルスに感染すると強烈な殺人、破壊衝動に襲われるようになる。



抑える手段はただ1つ、人間を殺す事だ。  
さもなければ、死ぬ。」

言葉が出ない。

俺は人を殺さなければ生きられない身体になってしまったというの  
か。

怖くてたまらない。

自然と指が震えた。

「まあ落ち着け。どうせ他の転生者を殺すんだ。問題はない。  
続けるぞ。」

エクリップスウイルス、別名ECウイルスは宿主をえらぶ。  
適性がないと死ぬからお前は幸運だったな。

「というか適性なきや選んでない。」

あらかじめ知ってていたんか。

気に食わない幼女だなおい。

撫でるぞこのヤロー。」

「許可。」

撫でてたら落ち着いた。ふわふわの金髪が気持ちいい。

「というわけで、ピンチになったら遠慮なく使え。デメリットはな  
い。」

「って言われてもなー。やっぱり抵抗はあるよ。恐ろしいもんな。」

俺には若干手に余る。

そもそもハルバード自体上手く使えてない。

練習あるのみだな。

「ありがとう。アニメ邪魔して悪かったな。  
お隣に挨拶行つてくる。」

「録画してるから大丈夫だ。そしてお隣は早朝出掛けた。」

そっか、残念だ。なら帰ってきたら行こうか。

「了解。じゃあ屋上で結界張って素振りしてくる。」  
「じゃあなー。」

暇な時間を潰すべく、俺は家をでた。

向こうの方向に例のジュエルシードの反応があったが無視する。  
わざわざ巻き込まれるような真似事はしない。

生き延びられればいいのさ。

もう少しで大きな事件が起きる気がする。

その時まで温存しとこう。

…ヤベッ、カギ忘れた。

その10 わかりやすいEC兵器(後書き)

ヒロインがリインに決定しました。

答えてくれた皆さま、本当にありがとうございました。

その11 無口？少女と不審男（前書き）

ご都合設定は見逃して下さい。

その11 無口？少女と不審男

「……………」  
「……………」

目の前に、緋色の長髪の女性と金髪をツインテールにした少女がいる。

テーブルを挟んでソファーに向かい合って、  
金髪の少女と俺は下を向いていた。

この部屋に来てから皆一切喋っていない。

その間に緋色の髪の女性はずっと俺を睨んでいる。

…あまりのストレスに胃潰瘍になりそうだ。  
…というか胃が痛い。

どうしてこうなった。

その答えを知るには、およそ30分前にさかのぼる。

俺は一時間ほど素振りと魔法、そして札の組み合わせなど試していた。

素振りは練習と体力作りを兼ねて。

魔法は補助、肉体強化の効率の上昇や畏の作り方など。

札はそのまま。

で、終わったあと結界を解こうとして愕然とした。

俺、防音と侵入禁止の結界は張ったけど魔力を外部にもらさないようにする結界は張ってない。

つまり、魔導師か、それなりに強い魔力を持ったやつがこの周辺にいますよ」と宣伝していたことになる。

ヤベ。どうしよう。

え？ 俺終了のお知らせ？

焦った俺は、ここ近辺の人に申し訳ないと心の中で謝りつつ、ランダムに魔力を撒き散らす作業を始めた。位置を特定させない為の手段だが、正直無駄にしかかってないと思う。

確か相手の女の子と転生者は小学生中学年くらいだった。洞察力その他もろもろが鈍いことを祈る。

チクシヨウ俺の馬鹿と自分を罵りつつ自室に戻ろうとすると、金髪の少女と緋色の髪の女性とすれ違った。ハルバード転移で送ってよかったと思うのもつかの間、緋色の女性の方にこっそり耳打ちされた。

「…後で来い。」

よく見れば女性は鋭い目付きで俺を睨み、少女は疑ってるみたいな視線。

バレたよ。誰かは知らんが拠点& a m p・素顔バレた。

二人は俺の部屋の隣に入っていた。

しかもお隣さんかよ。最悪だね。

家に入るやいなやアルテミスに泣きつく。

「ねえ、敵らしき奴に出会ったんだけどどうしよう!? 逃げる!? それとも戦う!?!」

アルテミスは深い深いため息を吐いて、キッチンの棚から贈り物を持ち出した。

俺に差し出してこう言った。

「気軽に行ってこい。どうせ金髪ツインテールだろ? なら事情を話せば仲間になってくれるさ。あいつは多分協力者を求めている。大丈夫だよ。」

肩をバシバシ叩きながらニコツと笑った。

「お前の好みだったりしてな。惚れて渡すの忘れんなよ?」

「もちろんさ!」

意気揚々と家を出た。

当たり前だが、ハルバードとかはおいてある。札は常備だが。

意気揚々と、隣のドアをノックした。

直後開いたドアから見えた冷たい視線に凍った。

アルテミスの嘘つき…!

そうして現在に至る。

重たい空気を抜えるだけの勇氣は俺にはない。お願いだからどっちか喋って下さい。

出されたお茶に口をつけるが、一切味がしない。もうやだこんな状況。

「あんたさあ、目的は何？ ジュエルシードかい？」

ジュエルシード。まあ魅力的な宝石だわな。

だが俺はわざわざ巻き込まれるような真似事はしないと何度も言う。

だからそれは誤解だ。

「ジュエルシードには興味ない。

むしろ差し上げよう。」

俺はジュエルシードを1つも持っていないのが残念だが。

「まさか局の魔導師か?!」

「違う違う。逆だ。俺は管理局に敵対している。

まだアクションは起こしてないがな。」

といつても警戒は解かない犬耳の女性。

そういえばこいつ人外だな。

外の廊下では無かったな。隠してたのか。

見えづらいが尻尾もある。

向こうがなにか言う前に、ペースを取られぬよう俺は一気に話しを持ち出した。

「実は俺は協力者を探している。」

この状況から「協力してくれませんか？」にはならないと思う。



この二人のどちらが上なのかは知らないが、金髪の少女は話さない。ならいい点を売り込み、仲間になって貰うしかない。

「君たちが会ったかどうかは知らないが、ジュエルシードを集める者に白い魔導師の少女がいる。その仲間に俺の倒さなければいけない敵がいるんだ。」

苗字はわからないが竜とかいうやつ。

能力は多分無限の剣製。

いつかあいつもこの殺し合いのことをするだろう。

なら先に、あいつが俺を殺すのを躊躇うものが必要だ。

「あいつは強い。それに助っ人もいれば俺に勝機はない。だから二人に協力を頼む。」

「当然だが損はさせない。ジュエルシード集めには全面的に手伝おう。」

と、ここでようやく少女が口を開いた。

「その話し、本当ですか…?」

「命に関わってるんだ。嘘はつかない。」

少し悩んだような顔をして考える少女だったが、まっすぐこちらを向いて話した。

「お願いします。」

「こちらこそ、よろしくお願いします。」

ぶかぶかと頭を下げた。

「ところで名前をいって無かったな。

俺は葉月紫苑。

紫苑って呼んでくれ。これからよろしく。」

「あ、私はフェイト・テストロッサです。

こっちは使い魔のアルフ。

私のこともフェイトでいいですよ。」

握手をした。

なんか幼い少女にしては傷付いた手のひらだな。苦勞してんのか。で紹介されたアルフはしかめっ面で答えた。

「アタシはなんかそいつ嫌いだ、フェイトがいうなら仕方ないね。アルフだよ。よろしく、紫苑。」

「よろしく。」

こうして俺は、初めてこの世界で協力者を得た。ああ、アルテミスは例外。

そして、俺たちはこれからのことを話しあった。

「これ、つまらないものですが。」

「わざわざありがとうございます。」

危うく忘れるところだった。

その11 無口？少女と不審男（後書き）

そんなわけでフェイトさんが仲間になりました。  
やったねたえちゃん！ 仲間が増えるよ！

「おいやめろ」

ok。

なのでこれからはフェイトさんとの行動がメインになります。  
あくまでヒロインはリインフォースですよ？  
か、勘違いしないでよねっ！！

その12 俺の(心が)泣く頃に。(前書き)

なかなか進まん。  
ごめーんね。

## その12 俺の(心が)泣く頃。

前回のあらすじ。

フェイトさんと仲良くなりました。

…ごめん。はしより過ぎた。

変に短くしようとするからこうなるんだ。

ちゃんと話すわ。

えっと、ちょうどお隣さんだったフェイトさんたちに、俺のうっかりから魔力バレしたので事情を話して同盟を組んでもらいました。

完璧だな。

あ、わからない人は前のお話呼んでね。

とりあえず信用して貰うために、いくつか贈り物をすることにしました。

自分の手の内を晒すことになるが、仕方ないんじゃない？

もちろんディバイダーやらリアクターやらの詳しい情報は言わない。

…いずれ敵対してしまうかもわからないんだ。注意しておきたい。なので公開するのは魔眼と数種類の札のみ。

「まずこれ。緊急時のためのオリジナル転移符。二枚一セット。」  
アルフとフェイトさんに一セットずつ手渡しする。

「ありがとうございます。」

わざわざお礼をいうフェイトさん。  
律儀だな。ええ子や…。

で、裏表をチラチラ調べたりしたり、匂いを確認しているアルフ。  
失礼すぎじゃね？

「この使い方は？ あんたにしか使えないんなら何の意味もない  
んだけど。」

いちいち言葉が強いんだよ。

俺が嫌いなのはわかるけどさ。

何で嫌いなのはわからない。

「破るだけで発動する簡易符だ。

転移の仕方は引き寄せ型。二枚は魔力の糸で繋がっているから、片  
方が壊れるとそれを持っている人物や物体をもう片方のある場所に  
転移させる。」

複雑な式とかは使用してないから魔力は外に漏れないし、魔力が漏  
れないから移動位置もわからない。」

「へえ、すごいじゃないか。」

もつと誉めてくれてもいいかな。

因みに欠点は魔力を大量に消費しないとつくれないうこと。

さまざまな条件を無視するのに砲撃一発分の魔力が必要だった。

だから渡したのは一人三セット計十二枚。

正直コストパフォーマンスがヤバい。

割に合わない。

見る人が見れば驚くのかもな。

「一応これも。試作品ゆえに効果は未知数。」

念のために渡すのは閃光を発する札。

気が付いたら出来てた不思議な札。

恐らく二度とつukれない。

「適当にやったら出来た閃光符だ。

最低でも閃光手榴弾フラッシュグレネードくらいの威力だから、近くで破らないように。」

でも失明や聴力を失ったりはしない…はず。確証は残念ながら持てない。

試したことないし。

「適当ってのが気になるけど…まあいいや。貰っとく。」

お前が取るのかよ。

「だってフェイトは戦闘中両手ふさがってるもん。ならアタシが使っさ。」

…ところで、これ遠隔発動できないのかい？ 破らないと発動できないのに近くで使うな、おかしいだろ？」

確かに。

でも、ルーン文字をいくつかだが使える俺と違って二人は全くの素人。

アンサス Fを刻めるなら話しは違うんだけどねえ。

ん？ 起動キーを設定すればいいのか。

意外に簡単だったな。

一旦札を返してもらってFを書き込む。  
そして術式をちよいと書きかえた。

「ほい。起動キーは『スタン』。  
投げて使える。」

あつという間に書きかえた俺の技術に驚いたのか、目を見開いて固まるアルフ。

フェイトさんは金色のペンダントに札を読み込みさせていた。  
なんかペンダント喋ってる。あの杖と同じタイプのか。

つて、「sir」つつつてるぞ。いいのか？  
それ男性の上官への敬語なんだが。

「そろそろもう一個の切り札紹介していいか？ あんま時間ないんだ。」

そっちもジュエルシード集めしなきゃいけないんだらう？

「確かにね。こっちもあんまり時間に余裕はない。ちよつと急いでくれるかい。」

「すみませんがよろしくお願いします。」

「OK任せろ。じゃあいこう。まずはキュベレイから。  
ふたりとも盾作ってくれる？」

疑問に思っではいるが、従ってくれる二人。結構素直なのね。  
二人が金色と緋色の盾を張ったのをみてから、ある魔眼を発動させる。  
右手でまぶたを覆って目を閉じる。

目が変わったのを確認してから瞳を開く。

「魔眼『キュベレイ』。」



現世に放たれた神代の魔眼は、目の前の獲物を石化させるべく、まずその直前にある障害から牙を剥いた。

未熟な魔導師が張った魔法壁ごとき、石化させるのに五秒もかからず完全に石にした。

端まで石になった盾は、跡形もなく碎け散った。

崩れたとたん砂ほどに粉々になり、そして消滅した。

二人に危害を加えるわけにもいかず、目の力が届く前にキュベレイを無理矢理止める。

実は石化の魔眼を止めるのにはいくつか工程が必要なのだが、俺は直死の魔眼に切り替えてから、直死をやめることによって失明のリスク無しに止めている。

この工程に約二秒。お手軽。

「な、なんだい今の！ 盾が石に!?!」

「瞳の形が変わったような…」

びつくり仰天、飛び上がるアルフ。

少し主人を見習え。

ほら。フェイトさんは冷静にキュベレイについて考え…震えてる？

恐いよな。

俺だってこんな目持ったやつに出会ったら全力で逃げるわ。

「ギリシャ神話のメデューサって知ってる？ これはそいつの目なんだけどさ。

本来目を合わせたら石になるっていうのはずなんだよ。けど俺の目は見た大抵のものや人を石にするんだ。」

「こりゃまたずいぶん恐ろしいもの持ってるね…。敵にならないでおくれよ?」

「善処する。」

「じゃあ今日はもう遅いし、これで解散しませんか？ なにかあったら連絡しますので…。」

「りょーかい。俺ん家隣だからチャイム鳴らしてくれ。」

家族いないし大丈夫。」

「わかった。じゃ、また明日。」

こうして二人と別れ家に帰った。  
つていつても隣だけどね。

「ただいま。」

「遅かったな。で、どうだった？

聞くまでもないか。」

「ああ。協力関係になった。

これで安心だな。」

これではばらくゆっくり過ごせる。

ところで、そのニュース。気になるな。

アルテミスの見ているテレビから流れるニュース。どーも怪しい。

『今日未明、海鳴市在住の　さんが、自宅で死亡しているのが見つかりました。』

さんの自宅には鍵がかかっており、警察では連続変死事件と  
にか関わりがあるとみて、調べを進めています。

変死事件は今月で七件目となります。』

嫌な予感しかしねえ。

なんか…厄介な事になりそうだな。

その12 俺の(心が)泣く頃に。(後書き)

次回、Lerroyさん、出番ですよ!!

あ、まだまだ転生者募集中です。  
どンドン送って下さい。

その13 殺人貴 殺人鬼(前書き)

さて、今回登場するのはLeroyさんが考えてくれた転生者です。  
皆さまも応募して下さいね！

### その13 殺人貴 殺人鬼

転生者にも色々ある。

原作を守り、あまり関わらないもの。

これは俺だ。

原作は知らないが、あまり動かず道筋を変えない。

次に、原作を守るが悪い運命を変えようとするもの。

これはこの前会った竜という剣製の少年に当てはまる。

結果的にだが、このパターンが一番幸福な終わりかた。一歩にいうハッピーエンド。になりやすい。

人を助けたり救ったりするものには多くの協力者が付くからだ。

そして完全に原作を無視するもの。

タチが悪く、対処はしやすいが大変な場合が多い。

これは原作を知ってるか知らないかにもよるが、「この世界は架空のものだ。なら何したって問題無い。」等を思ってしまったものがよくいる。

それらが原因で原作ブレイクをしだす。

ためらいのない人間が割合高いためにキャラクター殺しもいとわな  
い輩もいる。

さて、これまでの話して俺が何を言いたいかというと、

最近多発している連続変死事件。

犯人は転生者なのではないかということだ。

周辺にいた警察官に話しを聞いたところ、死体には、現代科学の全  
てを使っても謎の傷口、そして死因は一切不明とわからないことだ  
らけだそうだ。

何もかも不明となれば、これは十中八九転生者の犯行だ。指紋、さらには足跡等の証拠を全く残していないとすれば、それなり、若しくは相当経験を積んでいる。というか足跡がない時点で魔法使いだ。それなら証拠が無いのも納得だわな。<sup>アサシン</sup>どこの暗殺者なんだか。地球の人間には捕まえられないよ。

今、俺は危険を承知で封鎖されたマンションに来ている。

封鎖の理由は死者が多く出て、取り壊そうとしたが何故か事故が多発しやむを得ず立ち入り禁止にしたという曰く付きのマンションだ。誰も近付かないことから、怪しい人物が潜むにはぴったりの場所だ。時間も夜遅く。

これ以上の機会もない。

出会える確立はだいたい五分五分。

しかし、俺はここにいと確信を持っていた。

「出てこいコラー。さもないとマンションごと壊すぞ。」

左手に百貨で買った懐中電灯をもち、辺りを照らしながら進む。

右手にはリアクターとやらのナイフ。

ハルバードだどがさばるので今回はお留守番。だって2・5メートル。冗談じゃない。

別に札で喚べるから大した問題でもない。

かれこれ一時間探索しているが、いまのところ人の痕跡はない。

ほこりだらけの床にも足跡はない。  
困ったもんだ。

と、急に空気が変わった。

違和感、いや誤差の範囲内レベルだが気になる。

暗殺者らしき相手と殺し合いするかもしれん。ちょっとしたミスが即、死に繋がる。

一步一步、足音を消しながら回りの音や気配を探る。

それでも居場所はわからない。

考える。

俺が向こうの立場だった場合、どう襲撃するか。

己を極限まで周囲と同化させる。

決して悟られるな。

そして、殺るなら一撃で――

首を狙え！！

キーン！！

甲高い金属音が奏でられた。

俺のナイフと相手のナイフが重なった音だ。

懐中電灯なんてのはとっくにもってない。

だから敵の姿はわからない。

しかし俺には直死の魔眼がある。

これなら暗闇だろうと盲目だろうと死の線が見えるために大まかではあるが相手の動きがわかる。

「ようやく会えたつてのに、挨拶も無くいきなり殺しにくるかねえ  
」？」

ナイフでつばぜり合いをしているため二人の距離は限界まで近い。  
だからわかるのだが、こいつはアクセサリーをなにか付けてるらし  
くじゃらじゃらうるさく音がする。

これでよく気配消せたな。  
普通わかりそうなもんだが。

ま、いつまでもつばぜり合いが続くわけもなく、重い一撃で遠く離  
れる双方。  
まずった。また隠れられる。

「待てやゴリアー！！」

素早く闇に消えた敵に追い付くため全力で走る俺だが何故か見失っ  
てしまった。

こりゃ本気でマンションごと崩す必要があるかね。

エレベーターに乗ろうとした俺は壁に血文字があるのを見つけた。

『屋上にこい』だとさ。

畏なんだろうけど行かなきゃいけないよなあ。めっちゃくちや行きた  
くねえよ。

出オチありえるよこれ。

嫌な予感しかしないので、飛んで行くことにした。  
こっちの方がよっぽど安全だ。



屋上につくと、一人の人間が月夜に照らされてたたずんでいた。髪と瞳は血のように紅く、肌は異常に白い。

服装は真紅と金色のトレーナー、そしてジーンズと、とても暗殺者には見えない。

乱雑に切り揃えられた髪型と中性的な容姿のせいで男女の区別がつかない。

一応体格からするに男のようだが…。

「待った？」

フェンスを乗り越え笑って近付く。

「待つてなどいない。」

予想外の渋い声。ギャップ萌えありそうだね。

「一個聞きたい。何人殺った？」

ここで言ってるのは転生者の数だ。

七人中、何人が転生者だったか。

「二人。魔導師と召喚師だったが、どちらも相手にならなかった。」

へえ。ベテランじゃないか。

勝てるかどうか怪しくなってきた…。

でも、敵前逃亡はカッコ悪い。

せいぜい油断してろ。

「お前は…どうだ？ 手応えがあるといいが。」

人を見下すとか。死ね。

「どちらにせよ……………」

姿が消えた。マズイ！！

咄嗟に札を破りハルバードを喚ぼうとしたが、向こうの方が圧倒的に早かった。

耳元で声が聞こえた。

振り向く時間も無かった。

「お前で……………三人目だ。」

死神の鎌は、もう振り抜かれていた。

その13 殺人貴 殺人鬼（後書き）

次回から本格的な戦闘が始まります。

果たして、シオンはこのアサシンに勝てるのでしょうか？

どうぞ期待！！

その14 真・屈折延命(前書き)

初めての本格的な闘い。  
頑張りました。

## その14 真・屈折延命

先に動いたのは向こうだった。

全身に淡い灰色の光。肉体強化の証だ。

灰色は奴の魔力光か。特に拳を重点的に強化している。

徒手空拳での格闘戦をメインにする相手は、俺にとって相性が悪い。何せ俺の獲物はハルバード。

リーチが極端に長い一方、他の長柄武器と同じように懐に入られると対処しづらい。

それに時間あたりの攻撃回数にも問題がある。

素手、というか両手バラバラの武器は最も速く、多く攻撃を加えられる。

逆に両手持ち武器は最も攻撃速度が遅い。

当たれば勝ちなのだから速さは必要ない…そう思っていた時季が、俺にもありました。

一撃の重さをはかるためにあえて初撃をリアクターのナイフの刃の腹で受ける。

「フッ。」

「こんなの…なに？」

人の拳の重さじゃない。

鉄球にも匹敵する重力。ただの強化魔法なんかとは比較にならない、最高クラスのもの。

マニアック過ぎてどのキャスターも覚ええないような。しかしキャスターくらいじゃないと覚えていないような。

エミヤかこいつは。  
まさか強化魔術に特化した身だ、なんていうなよ？  
固有結界なんぞ持ってた日には、首を括るしかない。

「ずいぶんと魔導師らしくない魔導師だな、おい。葛木みてーだ。」  
ナイフを振るう手を一切止めず問い詰める。  
確かにそう言えばそうだ。

格闘術はよく見れば【蛇】だし、肉体を強化して戦うという戦法も  
葛木にそっくりだ。  
…魔術が自前って点が違うものの。

「葛木という者が何者かはしらんが、私に似ているのか。複雑な気分だ。」

フェイントを幾重にも仕掛け、執拗に急所を狙ってくる。しつこいんだよ。

内心毒を吐くと、集中が一瞬途切れ手元が狂った。  
その隙を逃してくれるわけもなく、頸動脈にどこかから出したナイフが走る。

長さが足りないかと判断しての早業か。  
隠し持っていたのは殺人鬼、もとい暗殺者として当然だろう。にしても予想外だ。  
血管に刃がかすった。

危なっ！！

文字通り首の皮一枚で繋がった。  
もし、あと少しでもナイフが長かったら死んでた。

冷や汗が止まらない。

「今のは惜しかった。もう3ミリだったのだが。」

「死ぬ気なんざさらさらねえよ。」

さっさとお前が死ねえ!!!」

今度は全力で突く。これなら弾かれはせよ多少のダメージは与えられるーはずだった。

刃の先端部を相手のナイフの背、ギザギザの部分で止められ、そのまま回転される。

死んだ、かも。

俺はナイフを突きだし固まった状態。

しかし向こうはそれを避け、逆手に凶器を構えている。

無防備な俺（獲物）と必殺の間合いの殺人鬼（狩人）。

幸い心臓と頸動脈が狙えない体勢だが、だからといってどうにかなるはずがなかった。

容赦無く脇腹に刺さるサバイバルナイフ。

即座に引き抜かれ、傷口から吹き出す熱い血液。

「ぐああアツ!!!!!!」

反射的に傷口を押さえるが、いつころにとまらない血。

内臓に刺さったかもわからない。

早く止血しないと…。

「トドメだ。今楽にしてやる。」

迫るナイフ。

この近距離では無理だ。

ならどうする？

「<sup>アンサズ</sup>『F』！！」

自爆覚悟で発する札の起動キー。

刹那、衝撃と閃光が俺の上着の右ポケットから起きる。

爆発はコンクリートの床を破壊し、俺の身体を吹き飛ばした。

偶然にも暗闇へ転がった俺は、そのままボロボロになった身体に鞭打ち走った。

さっきのせいで、もう瀕死だ。

出来るだけ遠くに…。

「…逃げたか。」

頼む、しばらく追ってくんない…！

畜生。

愚痴ってもなににもならないが、そうしなければやってられなかった。

治癒符は擦り傷程度しか治せないし、効果の高いものは爆発に巻き込まれ焼失した。

壁に手をつき必至に進む。

支えがないと倒れそうだから仕方ない。



つい先ほどの怪我の影響で、血痕が俺の通った道を示していた。これで俺の居場所はもろバレだ。目眩まじした意味が台無しだよ。

というかそろそろ出血で死ぬ。

家に速攻で帰りたい。けど札無いから無理なんだよな。

あ、なんだか意識が朦朧としてきた。

「ッ！！ こなクソがア！！」

残る力を振り絞って魔力放出をする。

まるで高町の砲撃のようになった俺の魔力は、あのアサシンが来るであろう方向を薙ぎ払った。

それでも、それでも。

あの殺人鬼は向かって来る。

漆黒の闇のなか、揺らめく紅い瞳が輝いている。

「来るな…。」

コツコツコツと、足音がだんだんと近付く。

その距離が、俺の寿命そのものだ。だから…。

「こつち来んなー！！！！」

それが零になった時、

「終わりだ。」

死ぬ。

手刀が俺の心臓を貫いた。

あまりにあっけない。こんなのが俺の終わりなのか？

「じふっ。」

血を目一杯吐き出す。

脇腹、胸、口と全身が血に染まっている。

嫌だ。

死にたくない。

こんな死に方…嫌だ。

でも…なにも出来ない。

急激に意識が遠くなって…あ。

ブラックアウトした。

あれ…どういふことだろうっ？

瀕死なのは変わらないが、死んでない。  
理屈も理由もなに一つ不明だが、まだ俺が死ぬのには早いというこ  
とか。

なら、目の前の障害を排除するのみだ。

ポケットの予備ナイフを握り締めた。

殺す！！

少し時間が経ったのか、こちらに背を向けて立ち去ろうとしている  
アサシン。

ここしかない。

「うおおおお！！」

首に左の腕を回す。そして、

こいつがしてくれたように、心臓を貫いた。

「な……、」

「おっと。ありきたりな台詞は御免だぜ……！」

「殺したはずだ……！」

その状態でよく喋れるな。尊敬するよ。  
だが……。

刺したナイフを捻る。

「……！」

さよなら。

わざわざ角度を変えて抜く。

既に死んだのかも動かない殺人鬼。  
念の為に焼き払う。

…。

人を……殺した…。

極限状態だったからか、そこまで抵抗は無かった。  
ただ、失血したことも含めて冷えた頭が理解する。

怖い。

涙が出た。

血に濡れた腕が、心臓の感触が、とても恐ろしかった。  
思わずその場で嘔吐する。

が、胃液しか出ず、何度も吐く。

「『アルテミス……』。」

念話を送った直後、今度こそ意識を失った。

その14 真・屈折延命(後書き)

人生最初の殺人。

立ち直れるのでしょうか？

その15 そつまでして生きる意味。(前書き)

一週三回更新にしようか悩む今日の頃。

その15 そつまでして生きる意味。

額に冷たいなにかが乗せられて起きた。

手で触つてみると濡れたタオルだ。

俺は風邪でもひいたつてののか？

そんなわけない。

…ないはず。

まだ完全に覚醒していないからか、若干ばやけて見える視界のなかには金色がどアップで映っていた。

金色を持つ知り合いは二人いるが、今のところこんなに優しく看病？してくれるものはただ一人。

てか紅い目でわかった。

「フエイト…？」

「起こしちゃいましたか、すみません。

今身体でおかしく感じる部分はありますか？ 精一杯頑張つて治したつもりなんですけど、あんまり治療魔法は得意じゃなくて…。」

「わざわざありがとう。ところでアルテミス…いや、フエイトと同じくらいの歳の女の子を見なかったか？ 俺の上官っぽい立場のやつだから聞きたいことがあって。」

「アルテミスさんなら出かけましたよ。

何日か戻れない用事が出来たとか。

その代わりに、私ができる限り説明します。」

用事？ 人が死にかけてるつてのに、なんだ。

仮にも上位神だろ。無視しろよ。

「えっと…まず昨日のことから話しますね。」

昨日の夜にアルテミスさんが訪ねてきたんです。

『シオンを助けてくれ』って。

事情を聞けば、大怪我を負った貴方を連れてきたけど助けられないらしく、私達にお願いしたそうです。

急いで行くと、リビングに血塗れの貴方が倒れていました。

急いで治療魔法をかけて治したんですけど、胸の傷だけはどうにもならなくて……すいません。」

「いや、治してくれたただけで嬉しいよ。

にしても胸の傷？」

上着をめくって昨日、あの殺人鬼に刺された位置を見た。

縫ってくれたのか、ふさがってはいたが、ずいぶん大きい傷痕が残っていた。

こりあ人前に出れないな、なんて思ったが、激痛で固まった。

「!」

「駄目ですよ！ 傷口が開いちゃいます！」

「ほんと迷惑かけてごめん。」

ジユエルシード集めだつてあつただろう？

こんな事の為に時間潰してもらつて悪い。」

「いいんです。困った時はお互い様ですから。それに休憩の日でしたから。」

はにかみながら答えてくれるフェイトさん。

この子本当に天使だよ。

こんなふざけた状況じゃなきゃ告白してるね。間違いない。

「そう言えばアルフは？ まさかフェイト一人じゃないよな？」

「アルフにはキッチンでお粥作つて貰つてます。食べれますか？」

「もちろん。」



しばらくして、アルフができたてのお粥を持ってきた。多少不味くてもがまんしろ、と言われ差し出された、玉子入りのお粥はなんだか…とても懐かしい味がした。

転生する前、俺は立派な社会人だった。

彼女も奥さんもいなかった俺には、病気になっても看病してくれる人は誰もいなかった。

子供の頃、母親が作ってくれたお粥を思い出して、涙が溢れた。

困惑する二人に俺はただありがとうといい続けた。

こんなくだらないことが、とても嬉しかった。

その後、心配してくれる二人を、大丈夫だから、と言って強引に家に帰した。

一人で考えたいことが山ほどあったからだ。

まず初めにアルテミス。

フェイトさんの話しを信じるに、ここまで俺を運んだのはあいつだ。なのになぜ治療はできなかったのか。

もしかしたら、転生者に直接手助けは出来ないのか。

なら今まであいつが口頭でのアドバイスしかなかったのに納得できる。

用事、というのは運んだことに対する注意か。

面倒な決まりなこと。なくなれ。

ふと、昨日何故俺は死ななかつたのかについて考えてみた。

あの時確かに心臓の刺され、倒れた。

しかし意識は消滅せず、油断して後ろを向いた殺人鬼をナイフで――

急に、あいつの心臓を刺した感覚が蘇った。

刺した瞬間こそ意識してなかつたものの、こうして自覚すると凄まじい恐怖が襲いかかってくる。

暖かい血に濡れた腕。

最初は硬く、そして柔らかい感触。

あの、怨みのこもった視線。

もう無理だった。

トイレに慌てて行き、蓋を開けたとたん嘔吐した。

胃のなかのものを全て吐き出す。

ついさつき食べたお粥も吐き、口の中に胃液の酸味が残った。

恐い。

やめろ。

そんな目で見るな！！

脳裏に焼き付いたその表情。

なんと振り払っても取れない。

落ち着くためシャワーに入るが、何度もフラッシュバックし嘔吐した。

身体も拭かず、布団に潜りこんだ。  
ガタガタ震え、ろくな思考が出来ない。

いつそ死んでしまおうか。  
そうさ。

こんな人間は死んで罪を償うべきなんだ。  
生きるため仕方ないといいつつ、なにも成せず生きる。  
こんなやつが生きていていいはずがない。

でも、死ぬ覚悟はなかった。

こんな、震えてトラウマに怯える日々が続いた。

アルテミスは、まだ、帰ってこない。

その15 そつまでして生きる意味。(後書き)

主人公はこんな人間です。

どっからどこまででも一般人であり、ろくに勇気もありません。

彼が強気で乱暴な口調なのも完全な強がりです。

仮面をかぶることでは強い自分を見せられない。

だから今回みたいなことに耐性がありません。

これからの期待、といったところでしょうか。

因みに、今回の彼は、朝田詩乃をイメージしています。

なので、彼がどうなるかも、お分かりですね？

その16 生きる理由。(前書き)

少々強引に感じるかもしれませんが、納得して下さい。

## その16 生きる理由。

初めての殺人から三日。

俺はいまだに立ち直れずにいた。

刃物や真つ赤な物体を見るたびに思い出すあの光景。

自分の意思とは無関係に身体が震え、吐き気をもよおす。

食事が作れないためインスタント食品を食べてはいるがすぐに吐いてしまうから結局食べていないのと同じだ。

嘔吐した回数は二桁を超え、俺はげっそりと痩せ細ってしまった。

フェイトに迷惑はかけられないからと、無理してジュエルシード集めを手伝うが、それが精一杯だ。

敵に顔が割れたくないという建前で顔を仮面で隠しているが、本当は顔色の悪さを隠すためだ。

この間一切遭遇しなかったのは奇跡と断言している。

もし戦闘なんかになったら、あつという間にやられていただろう。

敵が未熟なのか、それともこっちが優秀なのか。どちらにせよ、助かった。

トラウマがいつこうに改善しない状況をマズイと思った俺は、回らない頭ながら記憶を封印しようかと考えた。

しかし俺は忘却のルーンも札も魔法も知らない。

なにも出来ず諦めることとなった。

ぐったりと寝込んでいたところ、アルテミスは今なにをしているのか気になった。

心配などでは断じてなく、ただ今は頼れる人が欲しかったただけだが、またもや強くなってきた吐き気を抑えて、念話を試みた。

この三日、全く繋がらなかった念話が、若干のノイズまじりではあるものの、通じた。

『助けてくれ。』

『久しぶりの第一声がそれか。情けない。どうせ人殺した感覚が残っててトラウマになってるとかだろ。』

驚いた。一瞬で理解された、いや、とっくに予想していたような口振りに。

『わかるさ。今までけっこうな回数この遊びに参加しているんだから。』

私は前回までずっと女の転生者を選んでいたからよけいにだ。女は心が弱いからな。現代人もか。』

ああそうさ。どうせ俺は心の弱い現代人だ。

人殺しなんて、ニュースや本のなかでしか知らなかったよ。

当たり前だろ？ そういう社会で生きてきたんだから。

『私は今自由に動ける状況じゃないんだ。』

お前を家まで運ぶという『直接的な援助』を行ったからな。禁止されてる行為だ。

これだって隠れてはなしている。

だから手短にいう。

『生きる理由』を見付けろ。』

『生きる…理由？』

『そうだ。だがなんでもいいわけではない。』

死にたくない、好きな人が出来た、叶えたい夢がある…。

なにがあっても揺らがない理由だ。

そのためだったらなんでもできるような。』

『…』

『すぐに答えをだす必要はない。

思い付かないというのならヒントをやる。』

いいか？ 外部に漏らすなよ？ と念を押される。

『この殺し合いはふるいだ。

この世界にくる転生者たちは、必ず罪を犯している。記憶は奪ってあるが。

全てを懸けて戦える、そして生き残れるやつに最後のチャンスを与える救済装置でもあるんだ。』

人の本質はそうそう変わらない。

だからほとんどの転生者は前世と同じ罪を犯すんだ、とアルテミスは付け加えた。

『いいか。お前はこのアルテミスが選んだ男だ。その程度のことには負けてもらっちゃ困る。

お前は、生き残れる。

救いようがないなら最初から選んでない。』

そうだな。異常なまでの処女神が、男を選ぶなんておかしいと思っただよ。

そんな理由があっただなんて。

『じゃあな。しばらくしたらまた会える。

それまでさようならだ。』

こうして、念話は終わった。



生きる理由か…。

気分は少し楽になったから、多少まともな思考が可能になった。

改めて考える。

そうだ。

俺は平穏な暮らしがしたいと思っていた。

それはきつと、ほとんどの人が願うこと。

でも、生まれや回りの状況しだいでは、不可能になる人間もいる。例をあげると、生まれながらにして悪役と決まっている者。

主人公が掲げる正義というわけのわからないものに倒される彼ら。そんな終わり、認めたくない。

正義と悪なんてものじゃない。

同じ正義のぶつかり合いとは誰が言った言葉だったか。

その通りだ。

悪役にも、叶えたい願いがあある。

少なくとも、平和に暮らすというのもあるはずだ。

なら、俺はその未来が見たい。

善悪なんて関係ない。

そのようなものをまとめて壊して。皆で笑いあえる未来が見たい。

あいつが言った、ハッピーエンド。

その中には悪は含まれているのか。問い詰める。

俺は、犠牲の上で成り立つ幸せなんて嫌だ。

だから、そんな糞みたいな結末を目指す転生者を殺す。そして、どんな手段を使っても幸せな世界を作る。

最初は、フェイトからだ。  
救ってみせる。幸せにしてみせる。笑顔にしてみせる。  
誰も泣かせない。

絶対に。

## その16 生きる理由。(後書き)

と、いうわけで、紫苑くんの(仮初めの)生きる理由が見つかりました。

これから、この、未来を見る、というのにはどうすればいいかを具体的に実行していきます。  
お楽しみに。

ところで、このハルバードを見てくれ。  
こいつをどう思う？

すごく…大きいです。

なんかごめんね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0138w/>

---

魔法世界の異能持ち

2011年11月4日23時45分発行